

特集 2

新入生啓発セミナー

初修外国語のすすめ

交通事故死予備軍の学生に告ぐ



作：医学部職員 山本一美

初修外国語のすすめ

総合科学部
ドイツ語講座

◆ 竹島 俊之

諸君の多くは、中学、高校で英語を学んできたと思う。そして、なかには英語が得意な人もいれば不得手な人もいるであろう。

その学習を振り返り、「大学で一年間新しい外国語を学んで何になるのだろう」と疑問を抱く人がいるかもしれない。世界中で英語が、いわば国際語として使われており、「英語だけでいいではないか」と思う人がいるかもしれない。

そこで、そうした疑問を解消してもらうために、初修外国語を大学で学ぶ意義を述べておこう。

母国語以外の外国語をマスターすることは不可能

私がドイツ語の授業のガイダンスで真っ先に言うことは、「君たちがこれから学ぶのは会話の文法なのだ。会話の文法だからこそ一年あれば十分にマスターできるし、その文法を基礎にして、中級になれば普通の小説やエッセイを読めるようになるのだ。文法を忘れたら、一年間使った文法書を見ればよいし、後は辞書を丹念に引き、会話の文

法と同時に教わる構文規則に則って読めば、たちまちのうちに難しい文書でも読めるようになる」ということを述べることにしている。

ここで言う会話とは、「今日は!」、「元気!」、「ビール飲む?」という簡単な日常会話のことであり、決して、ドイツ人の話すことが分かったか、ドイツ人と議論できるといふことは意味していない。そんなことは、現地に行っただけで何年努力しても、普通の人ではできない。

どの言語でもそうだと思うが、綴(つづり)と発音は大体一致していて、簡単な「発音規則」を教わり一か月もすると、初出の単語でも大体正確に発音できるようになる。

英語の発音体系があれほど複雑なのは、英国が十一世紀初頭から十三世紀初頭にかけてノルマン人に征服され、英国の上流階級ではフランス語が使われていたことに起因すると思う。

「読み」、「書き」、「聞く」、「話す」の四技能が揃わなければその外国語をマスターしたことはないと思っ

ている人が多いように見えるが、それはとんでもない誤解だと思う。母国語以外にそれは不可能なのだということをもっと多くの人が知るべきです。



▼ シャロテンブルク (ベルリン) ベルリンのドーム



外国語を母国語と同じように駆使するということは、母国語を完全に捨てることを意味する

湾岸戦争でイラクとクウェートが戦ったとき、同じアラブ語を母国語とする国同士の戦争のために「兄弟間戦争」と言われた。その時、エジプト、クウェート、ヨルダン、サウジアラビアなど明らかに異民族である彼らが、なぜ同じアラビア語を母国語とするのかと、一瞬思い、すぐにかつてのサラセン帝国の構成国であったことに気づいた。ブラジルも、ポルトガルの植民地支配から独立したとき、あの広大な国土は、ポルトガル語を母国語とする国にきれいに統一されていた。何十、あるいは、何百という民族で構成されている国であろうと思われるのに。

「外国語を母国語と同じように駆使する」ということは、母国語を完全に捨てることを意味する」ということを、外国語教育を論ずる有識者たちが果たして意識しているのかどうか、疑問に思わざるをえない。私がいつも不思議に思うことは、「重要な情報はすべて文書を通して得られる」という当然すぎるほど当然なことの観点にたつて、どうして外国語学習の問題が論じられないのか、ということ。外交は外交文書を交換することにより、商売は商用文で、国際会議は会場で配布されるレジュメ、その後、出版される雑誌の掲載論文によって正確な情報を得るのである。

耳から入ってくる情報を、人は決して重要視しない。古来日本人は、隣国の進んだ中国の文化を受け入れるのに、返り点を付けて読むことによって、日本語へと取り込んできた。すなわち「書く」「聞く」「話す」という技能は最初から放棄して、専ら「読む」ことに全精力を集中させたのである。この日本人の英知は、明治になって西洋の進んだ文化を取り入れた際にも立派に生かされたと思う。すなわち、会話は最初から放棄して、文書を正確に読むことに全力をあげ、数多くの情報を取り込み、今日の日本を築きあげてきたのです。

正しく読み、作品を鑑賞し、楽しめれば十分ではないか

英国で古典教育が最も盛んであった十八世紀の詩人、S・T・コウルリッジ^(註)のギリシャ語で書かれた「西印度諸島における奴隷の悲惨な境遇」という詩の翻訳を頼まれて、そのギリシャ語を読んで驚いた。まさにホメロス並みの味わい深いギリシャ語であったから。その当時の英国の古典教育の水準の高さに改めて驚嘆したと同時に、その教育に疑問を感じた。何も、ホメロスと同時代人と同じように書いたり、話せたり、聞けたりしなくてもよいのではないのか、と。正しい構文論に則って読み、その作品を鑑賞し、楽しめれば十分ではないか、と。

私は文学部で二十年以上古典ギリシャ語初級文法を教えているが、二セ

メスター (Semester) 二年二学期制度の場合の一学期) の終わり頃になると、プラトンの「饗宴」の一節をきれいなギリシャ語で発音し、詳しい脚注があるとはいえず正確に訳していく受講生の姿を見ていると、感動すら覚える。そしてこれが、大学で初修外国語を教える教師が共通に抱く喜びだと思ふ。

最後に『ドイツ語』Deutsch

さて最後に、『ドイツ語のすすめ』に戻ることにする。ドイツ語は、フランス語とともに、『ニーベルンゲン歌』に代表されるさまざまなすぐれた中世古典文学を持ち、さらに最も早く書記言語が確立し、そのために最も純粹な形でゲルマン文学の真髄を味わうことができると思うからである。

小学生の頃から翻訳で慣れ親しんでいたミヒヤエル・エンデの『モモ』が、たとえ辞書を片手に膨大な時間をかけながらも、原典の美しい文体にじかに触れながらわずか一年間の勉強の後には読めることを、素晴らしいことと思わないだろうか。

どの初修外国語でもよい。全力をあげて取り組んで欲しい。二セメスターの終わり頃になると、その言語とその言語を話す国に興味と愛着を抱き、さらに一層力をつけたいと思うようになっていこう。

(たけしま・としゆき)

(註) 『英語英文学研究』(一九八五(昭61)、二) 第30巻、78〜82頁